



Title	大阪府立中之島図書館蔵蘭洲遺稿について
Author(s)	寺門, 日出男
Citation	懐徳堂研究. 2015, 6, p. 3-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56446
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪府立中之島図書館蔵蘭洲遺稿について

寺 門 日 出 男

序

五井蘭洲（一六九七―一七六二）は、懷徳堂の黄金期を支えた中井竹山・履軒兄弟の師であり、「懷徳堂の学風を確立した」（山川出版社『日本思想史辞典』、「五井蘭洲」項、平成二十一年四月）人物と位置づけられており、懷徳堂研究では看過し得ない存在である。

しかし、かつて陶徳民が懷徳堂研究の状況について、「山片蟠桃のような異色な門下生については研究密度がかなり高いのに対し、その師竹山・履軒についての検討は充分とはいえず、中井兄弟の師蘭洲という『通儒全才』についての研究はなおさら不十分である」（『懷徳堂朱子学の研究』三頁、平成六年三月、大阪大学出版会刊。）と指摘したように、懷徳堂学派の研究においては、山片

蟠桃・富永仲基の二人に焦点をあてたものが主流であった。近年、竹山・履軒については一定の研究成果が蓄積されてきているが、蘭洲をめぐる研究状況については、残念ながら陶の指摘から二十年を経た今も、大差ない状況である。

さらに、蘭洲を研究する際に利用される文献が限定的である点もまた、問題である。元文五年（一七四〇）に津軽藩を致仕して以後、蘭洲は懷徳堂の助教として後進の育成に努める傍ら、著述に精力的に取り組んでいたようであり、蘭洲の墓碑銘には、「撰述の書、既に笥（本箱）を累ねるほどであったと記されている。墓碑銘という文章の性格を考慮したとしても、それでも蘭洲が相当量の著述を残していたことは、ほぼ疑いない。それに対して、従来の研究で取り上げられるのは、『古今通』、『語通』といった日本古典の研究書、漢文では荻生徂徠『論

語徴』を批判した『非物篇』が主であり、その他の資料が粗上に上ることは少ない。そもそも、蘭洲撰とされる資料が、どれだけ量がどこに現存しているのか、その中に仮託書は含まれていないのかといったことが、現在なお、明確にされていない。

蘭洲関係の資料を最も多く所蔵しているのは、大阪府立中之島図書館である。総数は刊本・鈔本・手紙等、計約九十点にもものぼる。その中心にあるのが、『五井蘭洲講義筆記』と称される資料群である。それらが名称とおり、蘭洲の講義録であるならば、蘭洲の学問研究においては無論のこと、懷徳堂研究においても極めて重要な意味を持つ。

私はかつて、「五井蘭洲遺稿の伝存について」(都留文科大文学会『国文学論考』四十号、平成十六年三月)と題する論考を発表し、蘭洲著述がどのような経緯で伝存しているかを検討した。その際、大阪府立図書館に所蔵されている『五井蘭洲講義筆記』中の鈔本に、蘭洲自筆本が含まれている可能性を指摘したが、十分に検討することができなかった。

本稿は、その際に取り上げた『質疑篇』・『蘭洲先生遺稿』を中心に検討し、『五井蘭洲講義筆記』がどのような性格の資料なのかを明らかにすることを目的としている。

一

『質疑篇』・『蘭洲先生遺稿』を含む『五井蘭洲講義筆記』は、全六十五種から成るものである。同資料の全容は、若干の懷徳堂関係資料(平野翠・多治比郁夫、『大阪府立図書館紀要』第二十七号、平成三年三月発行)に示されている⁽³⁾。同論考ではこの六十五種の資料について、『筆者不明ながらすべて同筆』という説明が添えられている。『五井蘭洲講義筆記』という名称が、いつ、誰によってつけられたのかは未詳である。ちなみにこれらの資料群は、昭和二十一年十二月に大阪市内の古書店から一括購入したものである。この中には例えば、『中庸講義』、『易経紀聞』、『詩経講説』のように、講義の筆記録と考えられるものが大量に含まれていることから、古書店が命名していたのではないかと思われる。

はじめに、これから検討の主な対象とする、『質疑篇』・『蘭洲先生遺稿』の書誌情報を挙げ、その後に私見(※)を付したい。

① 質疑篇 一冊

〔寸法〕 郭内二十・三cm×十四・七cm

〔書式〕 四周単辺。有界。每半葉十行字数不定。版

心「黒魚尾」卷之（葉数）。

〔内題〕 「質疑篇」。

〔外題〕 書き題簽「質疑篇 五井蘭洲先生著并書」。

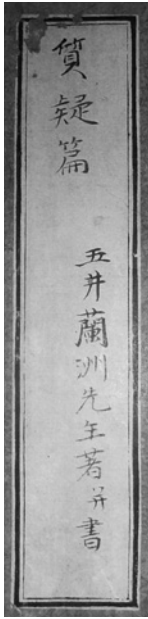
〔印記〕 卷頭に「尚経閣図書記」・「大阪府立図書館

蔵書之印」の印。³⁾

〔分類（請求）番号〕 一八六一三二一

※題簽（図1）の字は本文と別筆。内容は漢文体のいわゆる読書札記であり、「講義録」ではない。「五井蘭洲先生著并書」という題簽が本当ならば、五井蘭洲の自筆定稿本ということになるが、現時点では貴重書扱いはされていない。蘭洲の没後、中井竹山・履軒が遺稿を整理校訂して刊行したものに、『質疑篇』と題する同名の書があるが、これとは別本。巻頭に「寛延庚午（一七五〇）孟夏」の序文があり、同年、蘭洲が自撰したものと考えられる。

図1



② 蘭洲先生遺稿 二冊

〔寸法〕 上冊郭内二十・三 cm × 十四・七 cm、下冊郭

内十九・七 cm × 十四・五 cm

〔書式〕 四周単辺。有界。上冊・下冊ともに每半葉

十行字数不定。版心上冊・下冊ともに「黒

魚尾」卷之（葉数）。

〔内題〕 なし。

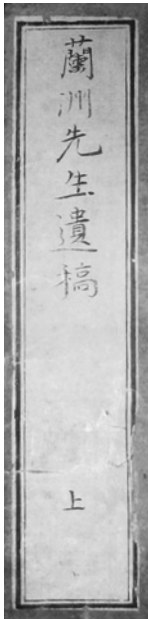
〔外題〕 書き題簽「蘭洲先生遺稿 上（下）」。

〔印記〕 各冊一葉に「尚経閣図書記」・「大阪府立図書館蔵書之印」の印。

〔分類（請求）番号〕 〇四一—四二〇

※題簽（図2）の字は①の題簽と同筆で、本文とは別筆。蘭洲が著した漢詩文を集めたもの。冒頭に「中風行擬白楽天」と題する七言古詩。二番目に「四楽説」という散文、その末尾に「宝曆己卯（九年）：執筆病床（病床に執筆す）」とある。三番目が「中

図2



風論」。四番目が「有間（引用者注…有馬のこと）記事」。いずれも、宝暦九年（一七五九）に蘭洲が中風を発症し、有馬温泉で湯治をしていた時の作が続けている。したがって、この書は同年に書き起こされたものと思われる。上下冊を通じて同筆であるが、上冊の五十六葉のみ別筆（**図3**）。ただし、その中に見られる字句の訂正は同筆（**図3**）。

まず用紙に着目すると、①と②の上冊とは匡郭内の寸法が同じである。それだけでなく、匡郭右端の疵の位置



図3

が同じである（**図4・5**）。このことから、両者は同じ版木で印刷されたものであることは疑いない。ただ、裏葉の左から三番目の界線を見ると、①には見られなかった疵が②の上冊にある（**図6**）ことから、①を印刷した段階では、版木の損傷が右端に限定されていたが、②上

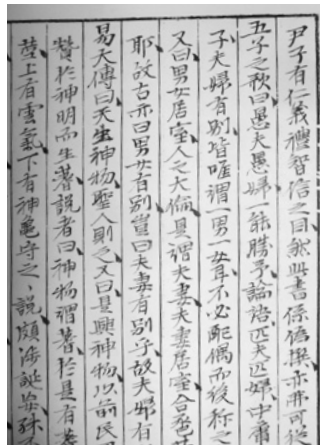


図4

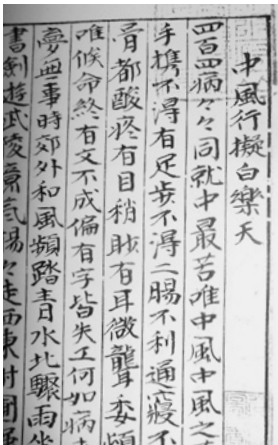


図5

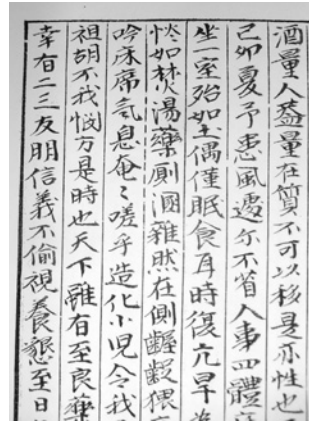


図6

冊の用紙を印刷する時点までに劣化が進み、②下冊を執筆する時点ではさらに損傷が進んでいたため、新たな版木を使用したと考えられる。

無論、①および②上冊のような疵のある版木で刷られたものが、市販のものとは考えられない。①と②とは、同一人物が手持ちの版木で罫線を印刷したもと考えるべきであろう。

次に、印記について触れておきたい。「尚経閣図書記」の印が誰のものであったのか、現段階では未詳であるが、「五井蘭洲講義筆記」の多くに押されているものである。「尚経閣」とは、おそらく旧蔵者の書室の名なのでであろう。①・②にはないが、「五井蘭洲講義筆記」には同印の外、「船曳氏蔵書」の印が押されているものが多数存在する。

したがって、この資料群は船曳氏なる人物の旧蔵書であった可能性が高い。①・②の題簽は、船曳氏の筆跡なのではないかと考えられる。

本文の筆跡は、一見ただけでは①と②が同一人の筆か否か、判断に迷う。しかし、双方とも蘭洲が書いたものであれば、同一人のものと考えても不自然ではない。なぜなら、②を執筆する前に、蘭洲は中風を発症して、左半身が不随になっているからである。発症当初は特に、筆記に困難を伴ったに相違ない。②上冊の冒頭部分（五十六葉）の別筆で書かれたものは、第三者に筆記を依頼し、後から蘭洲が校訂をしたものと思われる。つまり、①・②ともに蘭洲自筆本であると考えられるのである。

運筆を見ても、②が蘭洲自身の手になるものであろうことが察せられる。すなわち、上冊初めの方では文字が大きく運筆が遅い（図7）のに対し、次第に文字が小さく、筆の運びも速くなり、下冊に入ると一変して①の状態に近づいている（図8）。おそらく、上冊の執筆を始めた頃は、自由の利かない体で一字ずつゆっくりと書いていたのであろう。やがてリハビリの成果で次第に中風発症前に近い状態に近づいたものと思われる。

於是舉白列滿殆如枯草得雨潤泉縱大壑此一樂之
所仍也昔孔子之疾也季孫之饋以樂陽貨之歸有蒸豚季
孫軟有愛護聖人之意陽貨豈不意以孔子家貧蒸豚
不常有非大粟之樹有伯夷盜跖之異而其類人則同
矣有秦人之吾之異而其悅口則同由是觀之孔子必不
以陽貨故知其蒸豚以為好下酒也明又嘗曰曲肱枕之
樂亦在其中其在此時欲設今我血量飲雜有酒釀不至
此境雜有酒釀有血量則不知此快既有量有酒雅則
有病何足為心界上世有大禹以忠而遠之後世或今其說
致酒有狂藥之名此所謂偏醉已哉孔子則不然取焉而不

字言心其所言心但以此思慮言不考諸子言水花鏡月靈照
燁等之說孟子之言心也歎對耳目小體心為大體忠為其官子
思絕口不言心所以中庸終篇與心字方聖賢於心如此景如諸子說
則聖人胡待七十始從心所欲顏子亦真終身不違不違三月夫心
正焉矜焉收焉而後可以有為不與性同其方程朱以敬為尊陸子
不之喜爾以為是豈可一才哉愛之陸從德性入朱從問學入
自不若夫尊德性之真者以道問學道問學之真者必尊德性
德性問學車輪鳥翼不可偏廢其與欲一之也不若負汙子思而空
高明又曰不先入每云陸亦可喜談陸而非為則先人之非予欲必
一之愚乃竟足矣定厲此君子先君子固喜陸陸未嘗一之愚所

図8

図7

二

『蘭洲先生遺稿』が、蘭洲自筆本であることをさらに裏付ける資料が、『五井蘭洲講義筆記』の中にある。それは『非伊編』である。まずは書誌情報と私見とを掲げる。

③ 非伊編 一冊

〔寸法〕 外形二十七・二cm×十九・四cm

〔書式〕 無郭無界の紙を使用。十行二十字。

〔内題〕 「非伊編」。

〔外題〕 打付け書き「非伊編」。

〔印記〕 巻頭に「尚経閣図書記」・「大阪府立図書館蔵書印」の印。

〔分類（請求）番号〕 一八六一三四六

※外題と本文は同筆。内容は伊藤仁斎の『論語古義』等の著作を非難したもの。蘭洲の代表的著書の一つとして諸書にあげられているが、一般には『非伊篇』の表記で通用している⁽⁴⁾。管見の限り、府立図書館本以外に鈔本を発見できていない。全体に推敲の跡が見られる。末尾に本文と同筆で、「此一篇係宝曆十一年病中作」とある。

この『非伊編』冒頭部(図9)と②上冊所収の「古学論」(図10)とは、内容が類似しており、しかも同筆である。ただ、全体の分量は大きく異なっており、『非伊編』は全三十四葉余、概算で二万三千字程になる。一方、「古学論」は全体で約千五百字、ほぼ『非伊編』の序文に相当する。

では、両者の関係はどのようなか。双方の冒頭部分を掲げ、比較対照してみたい。(説明の都合上、初めから「古学論」と異なっている箇所を傍線を付し、後から本文の右側に書き加えられた箇所を太字にした。)

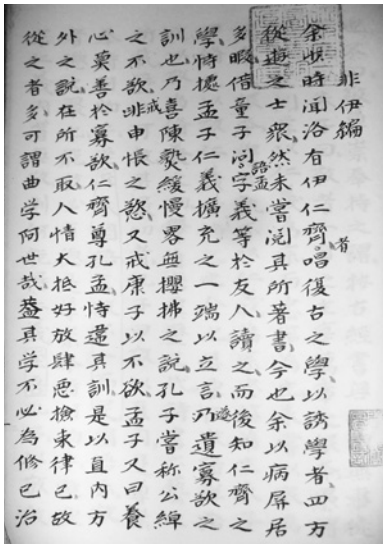


図9

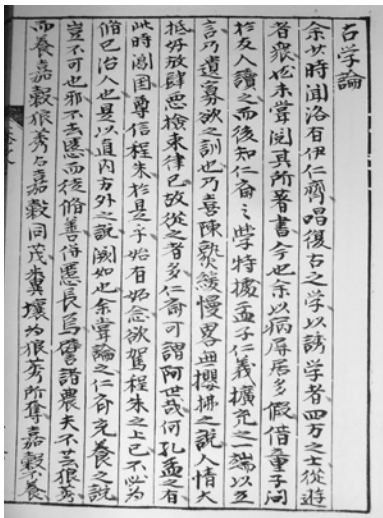


図10

古学論

余少時間洛有仁齋、唱復古之学、以誘学者、四方之士、從遊者衆。然未嘗閱其所著書。今也余以病屏居多借假、借童子問於友人讀之、而後知仁齋之學、特據孟子仁義擴充之一端以立言、乃遺寡欲之訓也。乃喜陳熟緩慢畧無摟拂之說。人情大抵好放肆惡具檢束律已。故從之者多。仁齋可謂曲学阿世哉。

非伊編

余少時間洛有仁齋者、唱復古之學、以誘學者、四方從遊之士衆。然未嘗閱其所著書。今也余以病屏居多借

暇、借童子問語孟字義等於友人讀之、而後知仁齋之學、
 侍據孟子仁義擴充之一端以立言、遂遺寡欲之訓也。乃
 喜陳熟緩慢畧無摟拂之說。孔子嘗称公綽之不欲、戒申
 悵之慾、又戒康子以不欲、孟子又曰、養心莫善於寡欲。
 仁齋尊孔孟、悻違其訓。是以直内方外之說、在所不取。
 人情大抵好放肆惡俱檢束律已。故從之者多。(仁齋)
 可謂曲学阿世哉。

「古学論」が書かれたのは宝暦九年、「非伊編」は宝暦
 十一年。「古学論」は仁齋の『童子問』のみを読んだ上
 での批判であるのに対し、『非伊編』では批判の対象が『語
 孟字義』等の諸書に、対象が拡大している。この違いは
 後者が二年後に書き改められたことと符合する。また、
 『非伊編』は「古学論」を基としながら、相当に改変を
 加え、さらにその上で推敲を重ねていることが分かる。
 こうした書き換えが、蘭洲以外の人物、例えば懷徳堂
 関係者などによって、蘭洲に無断で為されたとは考えに
 くい。『非伊編』は蘭洲の自筆稿本と考えるほかない。
 同筆の『五井蘭洲先生遺稿』についても、同じである。

三

では、これら〈五井蘭洲講義筆記〉を所蔵していた「船
 曳氏」とは誰か。それを明らかにできる資料が現段階で
 は見当たらないため断言はできないが、懷徳堂に関わり
 のある人物から該当しそうな者を探せば、船曳谷園(一
 七二四〜一八〇一)がその人ではないかと考える。

『稿本大阪訪碑録』所載の船曳谷園墓碑銘⁵⁾によれば、
 谷園は播磨出身の医者。二十四歳の時、大坂に出て開業
 する傍ら、懷徳堂第二代学主中井斃庵(竹山・履軒兄弟
 の父。蘭洲とは友人)の門下で儒学を学んだ。著書に『傷
 寒通明』・『中風通明』等があったという。書名からみて、
 後者は中風についての研究書と思われる。谷園は中風治
 療の専門医であった可能性が高い。

中井履軒がしばらくの間、介護に付き添っていたこと
 は、『蘭洲先生遺稿』上冊所収の「送中井徳二兄還郷」
 詩に、「臥病在他郷 今朝与君別(病に臥して他郷に在
 り 今朝、君と別る)」とあること等で明らかであるが、
 竹山あるいは懷徳堂が、蘭洲のために他にどのような手
 当てを行ったのか、よく分かっていない。

宝暦八年、谷園が師事していた中井斃庵が亡くなって

いる。その一年後、蘭洲が病を發した時、谷園がなお懐徳堂で学んでいたかは分からない。しかし、谷園が中風の専門医であったことから、竹山に依頼されて、あるいは谷園自らが申し出て、蘭洲の治療にあたった可能性が高い。

五井蘭州は生前、自分の著述をすべて処分するよう、周囲に依頼していたらしい。⁶⁾ それなのになぜ、このように蘭洲の著述がまとまって残ったのか。蘭洲の最期を看取った谷園が、その遺稿を処分してしまうことを惜しみ、一括して引き取り、保存していたものが、〈五井蘭洲講義筆記〉として今に伝わるものではないかと、考えられるのである。

結

蘭洲は中風に罹ってもなお、「披繙（読書）・論著し、斃れて後已」⁷⁾ んだと伝えられる。現に、本稿で取り上げた『蘭洲先生遺稿』は、中風発症からそれほど時を置かずに、『非伊編』は宝暦十一年に、それぞれ著わされ、その後も推敲を繰り返していた様子が窺える。彼は宝暦十二年に没しているから、「斃れて後已む」という竹山の言葉は、決して誇張ではなかったのである。

ただ、蘭洲は自己の著述を公開すること、自己を喧伝することを好まなかった。同じく墓碑銘によれば、「請梓者屢而弗聽（梓を請ふ者、屢々なるも聴さず）」、竹山に「死之日、勿碣焉、勿文焉。（死するの日、碣する勿れ、文する勿れ）」と遺言していたという。そのためもあって蘭洲の学問的業績も、その思想も、正しく把握されてこなかった。

だが、蘭洲のこうした生き方が、後進に与えた影響は決して小さくない。たとえば中井履軒は、その代表的な撰述である『史記雕題』第一冊見返しに、「復謔不餽而忘人、因以為天人（復謔して餽せずして人を忘れ、因りて以て天人と為らん）」⁸⁾ という、『莊子』庚桑楚篇に基づく書き入れをしている。そこには世俗的が自己をどう評価するかは意識せず、ひたすら自己を高めるために学問に打ち込む、履軒の生き方が表現されている。それは、中風に倒れた後も読書・論著に励んだ師・蘭洲の姿を、強く意識したものであつたらう。ちなみに、履軒も蘭洲と同じく、生前は門人等が刊行することを求めても、決して許さなかったという。蘭洲の処世観が竹山・履軒をはじめとする懐徳堂学派にどのように継承されていったのかは、今後もつと検討する必要があるだろう。

本稿における検討によって、『質疑篇』・『蘭洲先生遺稿』

および『非伊編』は、いずれも蘭洲自筆本であることが明らかになった。さらに、これと「同筆」の「五井蘭洲講義筆記」六十五種全てが、蘭洲自身によって書かれたものである可能性が極めて高い。これら全体についての検討も、今後の課題としたい。

注

(1) 「五井蘭洲墓碑銘（中井竹山撰）」による。蘭洲の墓は、実相寺（現大阪市天王寺区上本町）に今も残っている。墓石の劣化が著しかったが、懷徳堂記念会によって修復され、文字の判読も十分に可能である。池之上見敏「五井蘭洲の墓石保存処理について」（『懷徳』七十七号、平成二十一年一月、懷徳堂記念会）を参照されたい。

(2) 同図書館所蔵の懷徳堂関係資料を網羅した目録として、他に湯城吉信「大阪府立中之島図書館所蔵懷徳堂関係資料目録」（大阪大学中国学会『中国研究集刊』第三十七号所収、平成十七年六月）がある。この目録は「若干の懷徳堂関係資料」に載る情報に基づき、カード検索と実見とに基づいて補完し、同館所蔵の懷徳堂関係資料の全容を紹介したものである。次のサイトでも公開されている。http://www.ctosakaku.ac.jp/~y_yuki/

(3) 本稿では、大阪府立図書館の受入印（受入年月日・受入番号）

については割愛した。

(4) たとえば『漢学者伝記及著述集覧』（小川貫道著、昭和十年四月）、『近世漢学者伝記著作大事典』（関儀一郎他著、昭和十八年六月）は、ともに蘭洲の著述として『非伊篇』の名を挙げている。その原因として考えられるのは、「五井蘭洲先生墓碑」に『非伊篇』とあること、蘭洲の徂徠学批判の著述が『非物篇』であること等によると思われる。

(5) 本稿では『浪速叢書』第十卷（昭和四年五月、浪速叢書刊行会）によった。同書によれば、谷園の墓は生玉寺町（現大阪市天王寺区生玉寺町）の銀山寺にあったという。銀山寺は現存するが、谷園の墓石はもとより、船曳家の墓所自体も残っていない。

(6) 『非物篇』序（竹山撰）に、蘭洲没後、竹山・履軒兄弟が、「奉治命、以整理遺稿（治命を奉じ、以て遺稿を整理す）」とある。竹山があえて「治命（健康な時の命）」の語を用いていることから、健康な時には原稿の校訂を依頼されていたものの、死期が近づくと、逆に遺稿を処分すよう依頼していたと考えられる。

(7) 注1に同じく、『五井蘭洲墓碑銘』による。

(8) この文の解釈については諸説あるが、ここでは履軒撰『莊子雕題』に拠った。